ちょっとブレイクしませんか?

第55回 野いちご（1957年 瑞典）

イソップ寓話集に「夢」と題する話がある。イソップは答えた、「奥様、夢に欺かれたからといって、驚くには及びません。夢というものはすべてが真実ではないのです。詩神を統べるアポロンの願いを入れて、ゼウスが予言の術を授けましたが、その結果、アポロンは神託を司る神々の第一人者となりました。アポロンは全人類の尊崇を受けると、他のすべての神々を見下し、何彼につけて驕り高ぶるようになりました。そこで上位のゼウスは腹を立て、アポロンが人間の間で余りにも大きな力を持たぬよう、正夢というものを作って、睡眠中に未来のことを告げさせたのです。誰ひとり自分の予言を必要としなくなったことに気づいたアポロンは、ゼウスに許しを求め、予言の権威を奪わないで下さいと頼みます。ゼウスも歩み寄り、第二の夢を作ると、睡眠中の人間に偽りを示させることにした。夢の確かさに迷った人間が、再び元の予言にすがるように、という訳です。このような理由で、初めに作られた夢が現れると、その夢は正夢となります。ですから、夢でご覧になったことと、その後に起こったこととが違ったからといって、驚いてはなりません。奥様のご覧になったのは第一の夢ではなかった、夢の中で欺く逆夢が現れたのです」

名誉学位を受ける予定の老人が前夜に己の死を暗示する悪夢を見る。内容は「人気のない町を1人で歩いていると『針のない時計』を見るや否や心臓の鼓動が高鳴り、振り返ると通りに立つスーツ姿の男の顔は歪み溶けてしまう。鐘が鳴り馬車が猛スピードで通りを走ってきたが横転。馬車からこぼれ出たのは棺桶。棺桶から手が伸びて老人を捕えようとする」というものだった。恐怖で老人は突然覚醒。老人は授賞式場のあるルンドまで車で行くと主張。案じた息子の嫁が同行することに。旅の途上で老人がかつて過ごした思い出の場所で車を止める。そこで老人は、かつて籠一杯の野いちごを摘んでいた初恋の女性と出会った。老人はそこで初恋の人によく似た娘と出会い快く車に乗せる。老人はじっくりと己の人生を顧みる。青年時代に婚約者を弟に奪われたこと、老人の無関心に辟易して妻が不倫したことを想起する。そして息子の嫁は「子供がないのは老人を見て育った息子が家庭に絶望していたためだ」と告白する。

学者としての名声とは裏腹に老人の内的生活は空虚だった。だが旅の間に若い青年男女、諍う中年夫妻、昔馴染みの店主夫婦、老母と出会い、老人の心境は次第に変化していく。晴れて老人は名誉博士号授与式に出席。夢と現実と回想が交錯する慌ただしい1日だったが老人はその夜、息子と家族について語り合う。家の外では昼間に出会った若者達が老人の栄誉を心から祝福していた。心も満ち足りて眠りにつく老人。その老人が見る夢は前夜の悪夢と違い不思議な安堵感を伴っていた。

イソップの時代に正夢と逆夢が記されていたのは驚きだ。消えゆく意識の中で青春時代を回想しながら老い先短い心境を描いた「野いちご」。高齢社会の到来の遙か以前に孤独な老人の心を鋭く描出した歴史に残る名作で、名匠ベルイマンのロードムービーだった。長引く疫病、戦争、不況などの暗く厳しい現実世界（リアルワールド）、叶うなら悪夢であって欲しい。ところで新年の初夢は何でしたか?

粥川（かゆかわ） 裕平（ゆうへい）
（精神科医・映画評論家）
名古屋工業大学 名誉教授
かゆかわクリニック院長